

日曜聖書講筵（婦選会館公開集会）

## 洗礼のヨハネとその死

——マルコ伝第6章14～29節——

小池辰雄

1964年10月18日

洗礼者ヨハネ 荒野の声 公平と正義 身体の潔め 回心 非業の最後 神と個人の直結問題  
何を為すべきか わが靈を受けよ 十字架の突破口 根源の力 十字架の先駆 与える義 天  
的必然性

## 【マルコ6・14～29】

<sup>14</sup> 斯てイエスの名顯あらわされたれば、ヘロデ王わききて言う『バプテスマのヨハネ、死人の中より甦うちえりたり。この故に此等の能力ちからその中に働くなり』<sup>15</sup>或人は『エリヤ』といい、或人は『預言者、いにしえの預言者のごとき者なり』といふ。ヘロデ聞きて言う『わが首斬きりしヨハネ、かれ甦うちえりたるなり』<sup>17</sup>ヘロデ先にその娶りたる己おのが兄弟ピリポの妻ヘロデヤの為に、みずから人ひとを遣つかわし、ヨハネを捕えて獄に繋つなげり。<sup>18</sup>ヨハネ、ヘロデに『その兄弟の妻を納いるは宜よろしからず』と言ふに因る。<sup>19</sup>ヘロデヤ、ヨハネを怨うらみて殺さんと思おそ能あたわざ。20 それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人ひとたるを知りて、之を畏れ、之を護り、且かつその教をききて、大に悩みつも、なお喜びて聴ききたる故なり。<sup>21</sup>然るに機おりよき日ひ来れり。ヘロデ己おのが誕生日に大臣・将校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴ふるまいせしに、<sup>22</sup>かのヘロデの娘まいりやり来て、舞まいをまい、ヘロデと其の席に列れる者ひととを喜ばしむ。王、少女に言う『何にても欲しく思うものを求めよ、我あたえん』<sup>23</sup>また誓ちかわいて言う『なんじ求めば、我が國の半なかばまでも与えん』<sup>24</sup>娘むすめいでて母にいう『何を求むべきか』母言う『バプテスマのヨハネの首を』<sup>25</sup>娘むすめただちに急ぎて王の許もとに入りきたり、求めて言う『ねがわくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速かに賜すみやわれ』<sup>26</sup>王いたく憂いたれど、その誓ちかわと席に在る者ひととに対して拒むことを好まず、<sup>27</sup>直ちに衛兵を遣つかわし、之にヨハネの首を持ち来ることを命ず。衛兵ゆきて獄ひとやにて、ヨハネを首斬り、<sup>28</sup>その首を盆にのせ、持ち来りて少女に与う、少女これを母に与う。<sup>29</sup>ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體しきばねを取りて墓に納めたり。



## ●洗礼者ヨハネ

洗礼のヨハネという人を先ず知らないと、またその死が何であるか分からないので、洗礼者ヨハネというものを、大まかですが、学びたいと思います。洗礼者ヨハネに関する記事は、まず第一にルカ伝に出てきます。ルカ伝1章57節、

「<sup>57</sup>さてエリザベツ産む期みちて男子を生みたれば、<sup>58</sup>その最寄のもの親族の者ども主の大なる憐憫を、エリザベツに垂れ給いしことを聞きて、彼とともに喜ぶ。<sup>59</sup>八日めになりて、其の子に割礼を行わんとて人々きたり、父の名に因みてザカリヤと名づけんとせしに、<sup>60</sup>母こたえて言う『否、ヨハネと名づくべし』<sup>61</sup>かれら言う『なんじの親族の中には此の名をつけたる者なし』<sup>62</sup>而して父に首にて示し、いかに名づけんと思うか、問いたるに、<sup>63</sup>ザカリヤ書板を求めて『その名はヨハネなり』と書きしかば、みな怪しむ。

これはもう既に靈的に示されたわけです。

「<sup>64</sup>ザカリヤの口たちどころに開け、舌ゆるみ、物いいて神を讃めたり。」（ルカ1:57～64）

ザカリヤとエリザベツ即ち、ヨハネの父母がいかに子どもを求めていたか。けれども、子どもが与えられなかつた。それで祈り求めていたことが書いてあるわけです。そのことはルカ伝1章8節あたりから読まなくてはならないわけです。ヨハネの誕生の前に、11節のところを見ると、

「<sup>11</sup>時に主の使あらわれて、香壇の右に立ちたれば、<sup>12</sup>ザカリヤ之を見て、心騒ぎ懼を生ず。<sup>13</sup>御使いう『ザカリヤよ懼るな、汝の願は聽かれたり。汝の妻エリザベツ男子を生まん、汝その名をヨハネと名づくべし。』

という示しが既に来ていたわけです。ヨハネの誕生自体が——これは祭司の家柄に、非常に敬虔な父母のもとに生まれた——それが既に御靈によつて示されたことであつた。15節に、

「<sup>15</sup>この子、主の前に大ならん、また葡萄酒と濃き酒とを飲まず、母の胎を出づるや聖靈にて満たされん。」

と書いてある。このことが非常に大事なことです。

「<sup>16</sup>また多くのイスラエルの子らを、主なる彼らの神に帰らしめ、<sup>17</sup>且<sup>かつ</sup>エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん。」

先輩の預言者のうちにエリヤという預言者が示されて、

「エリヤの靈と能力とをもて、主の前に往かん」とある。ヨハネという人は旧約の最後の預言者であり、かつまた新約への橋を渡しているところのもの、ちょうど旧約と新約の橋渡しです。この洗礼のヨハネというのは特別な地位にある人です。エリヤの再来のごとき存在が既に約束されている。エレミヤが、



「母の胎をまだ出づる前よりあなたは私を選んだ」

ということを語つておりますが、そのように、人の存在は、何も預言者に限らず、皆さん一人ひとりが神さまの深い選びのうちにあるというわけです。

そういう生れであつたということは極めて注目しなければならないことです。その後のヨハネの生活は一向分かりません。イエスの生活がほとんど、伝道に立ち出でるまでのことは極めて史料が少ないが、ヨハネも同じようなわけです。ヨハネが洗礼に立ち上がる。これがマルコ伝の最初に出ている記事です。これは何もマルコ伝に限らず、四福音書に全部共通に出ています。特に、マルコ伝は初っぱなにそのことが書いてあるので、非常に著しいわけです。

### ●荒野の声

これは既にやつたところですが、ちょっともう一遍開いてください。マルコ伝第1章のところに、

「<sup>2</sup>預言者イザヤの書に、『視よ、我なんじの顔の前に、わが使を遣す、彼なんじの道を設くべし。<sup>3</sup>荒野に呼ばわる者の声す「主の道を備え、その路すじを直くせよ』と録されたる如く、<sup>4</sup>バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。」（マルコ1・2～4）

と。洗礼者ヨハネは公的な生涯に立ち出でた。それはマタイ伝によりますと、

「<sup>2</sup>『なんじら悔改めよ、天国は近づきたり』（マタイ3・2）

マルコ伝では、

〔15〕「<sup>15</sup>『時は満てり、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ』（マルコ1・15）

とある。

どの福音書にも預言者イザヤの言葉が引用されている。イザヤ書40章の有名なところです。イザヤ書40章は、いわゆる第二イザヤといわれる無名の偉大な預言者の最初の章に当たるところで、40章から55章までが第二イザヤです。カーライルが

「イザヤ書40章は、文学的に言つても素晴らしいものだ」

と言つてゐる。イザヤ書40章1節から、

「<sup>1</sup>なんじらの神いたまわく、なぐさめよ汝等わが民をなぐさめよ。<sup>2</sup>懲<sup>ねんご</sup>るにエルサレムに語り之によばわり告げよ、その服役の期<sup>とき</sup>すでに終り、その咎<sup>とが</sup>すでに赦されたり。そのもろもろの罪によりてエホバの手よりうけしところは倍したりと。

云々と言つて、バビロニアに捕囚されたイスラエルの民の捕囚の深い意味は、神に対する不信がついに神の審判に合つて、北王国イスラエルの滅亡の後で、南王国ユダがバビロニ



アに滅ぼされた。これは神の手先になつてバビロニアが神の審判をイスラエルにくだした。それで、主なユダヤ人が向こうへ連れて行かれましたから、数十年の捕囚生活をバビロニアにおいてしました。それから、服役の期が既に満ちたので、今、赦される。その赦しを与えるものは、バビロニアではなくて、バビロニアを滅ぼしたところのペルシヤの王クロスがついに政治的な意味において解放する。実は宗教的な意味では、これが赦されてまた元へ戻るということになるということを、無名の預言者がこの歴史的な意味を、神の歴史の意味を深くとらえて、かく歌い始めたわけです。それで、帰り行くのに、

<sup>3</sup> よばわるものの声きこゆいわく、なんじら野にてエホバの途みちをそなえ沙漠に  
われらの神の大路をなくせよと。

「神さまの大路をなくせよ」ということは実は、

「自分たちの心をなくして帰れ」

ということです。神さまは、路がどんなに険しくても渡つていらつしやいます。

「エホバに今、救われて、赦されて帰るのだから、お前たちも心をなくして帰れ」ということが、「われらの神の大路をなくせよ」という、こういつた表現で出てくるわけです。

<sup>4</sup> もろもろの谷はたかく、もろもろの山と岡とはひくくせられ、曲りたるは  
なく、崎嶇はたいらかにせらるべし。」（イザヤ40・1～4）

そういうふた、従順な真つ直ぐな心で帰つて行けということです。正しい真つ直ぐな路をそこに造れということは、この洗礼のヨハネにおいては、悔改めの、心を回らして、そして<sup>ただ</sup>義しき心に帰れということです。即ち、第二イザヤのこの言葉を受けて、ヨハネ自身が、

「自分は荒野の声だ」

と言つてます。

ヨハネ伝の方に、

「<sup>19</sup>さて、ユダヤ人、エルサレムより祭司とレビ人とをヨハネの許もとに遣して『なんじは誰なるか』と問わせし時、ヨハネの証はかくのことし。<sup>20</sup>すなわち言いあらわして諱いまず『私はキリストにあらず』と言いあらわせり。<sup>21</sup>また問う『さらば何、エリヤなるか』答う『然らず』問う『かの預言者なるか』答う『いな』

「かの預言者」というのはエレミヤのことらしい。

<sup>22</sup>ここに彼ら言う『なんじは誰なるか、我らを遣しし人々に答えるように為よ、なんじ己につきて何と言うか』<sup>23</sup>答えて言う『私は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼わる者の声」なり』（ヨハネ1・19～23）

「私は預言者イザヤの云えるが如く、ただ荒野の声であつて、声に過ぎないのだ」



と、ヨハネ伝の記者が洗礼のヨハネの言葉として伝えているわけです。ヨハネ自身は自分を預言者とも思わなかつたということが、むしろこのヨハネ伝ではつきりしている。しかしながら、福音書の記者たちは、これをはつきりと預言者として見、かつまたエリヤの再来の如き預言者として見ていているわけです。そしてまた、その使命からいうと、正に第二イザヤの、イザヤ書40章のこの言葉が彼の使命を表しているということにおいて、みな一つである。ヨハネの自覚自身が、「自分は荒野の声だ」と言つている。これは即ち、来たるべき人の道備えをしている者だという。「道備え者」である。正に先駆者であるというわけです。

## ●公平と正義

キリストを迎えるのに、

「先ず心を義ただしくして行いを改めなくてはいかん。しかも、神の審判は近いから、その審判に耐えられない」

というわけです。そういう意味において、心を直くしました義しき行いという、「直・義」というような言葉がさんざん旧約に出てきている。旧約を貫いている一番力強い言葉は「義」です。イスラエルの民は義の民であると言つてもいいくらいに、非常に義を重んじた。ここに彼らの本当の脊椎骨があるわけです。

もうもろのいろんな宗教に——御利益宗教やいろいろあるけれども——宗教はうつかりすると、御利益になるのが多い。そして、御利益宗教は大いに、ある意味において榮える。けれども、イスラエルの神は、何はさておき、一番中心を流れているもの、中心に立つているものは義の柱である。このことはもう絶対に間違いのないところです。旧約の預言者たちは、

「本当に公平と正義とを行え」

ということを強調した。「公平」と「正義」という言葉がよく出できます。「ミシユパー」と「セデカー」という字です。

「公平」という字はもともと「審き」という字からきている。「審く」ということは、「正しく評価する」ということです。「正しく評価する」ということが本当の「審く」という意味なので、何も直ちに賞罰に關係することではない。そういうた、正義、直ということ。そして事実、心が義ただしければそういうように実行できるということが、かなり強く肯定的に旧約においては考えられているわけです。

ただし、それが知らない間に、外形的な、外的な行為にとらわれてみたり、あるいは、

「宗教的な儀式を護ることが義しい生活である」

と考えられてみたりと、だんだんズレを生じてきた。いわゆるパウロが言うところの「律法の義」ということになつてしまつた。律法は、本当はそういうものではない。神さまの、また預言者たちが唱えているところの「義」は、いわゆる律法の義ではない。心の奥底に



おける義と、それから発するところの行為、これが預言者の宗教ですから。それを貫いて全うした者がキリストです。それがいわゆる律法の義の方になつてしまふ。

### ●身体の潔め

洗礼のヨハネはもちろん、この預言者の方の義を言つてゐるわけです。ということは、彼が聖霊の人である。また、生活からいまして、いわゆる肉食はしませんし、非常に素衣粗食であつた。

ヨセフスという非常に客観的に歴史を書いたユダヤの歴史家があるが、これは紀元30幾年くらいに生まれた人ですが、『ユダヤ戦記』というものの中にこんなようなことが書いてあるそうです。これは果たしてヨセフスの筆であるのかということが多少疑問であるということですけれども。

「ヨハネは肉のない霊のように生きた人であつた。あらゆる罪を糾弾し、木片を最も常食にしていた。」

なんて書いてある。木のきれっぱしをかじつていていたとみえる。

### 「蝗と野蜜を食べていた」

ということが書いてありますが、「蝗と野蜜」どころでない。木のきれっぱしを食べていたというような人で、それがどこまで本当だか知りませんけれども、とにかく、そういうことが伝えられるほど、非常にいわゆる禁欲的な聖者型の生活をしていた。そういうたごく自然の乏しいものを食べていたのも、やはりエリヤがそうとして、列王記略17章あたりからずつとお読みになると、エリヤのことが詳しく書いてあります。

「カラスが運んできたもので食べていた」

なんてこともあります。そして、常に清らかな水を飲んでいたわけです。預言者の中では特に——エリヤはさつき言いましたけれども——いわゆる文書預言者の中では、義の預言者アモスに非常に性格的に似てゐるのではないかと、その点はホセアあたりとだいぶ違うと思われます。

ここでひとつ大事なことは、これは聖書ではなく、やはり他の本に書いてありましたが、ヨセフスの伝えた文章に、

「ヨハネの洗礼は、罪滅ぼしではなくして、身体の潔めのために用いられたので、神に喜ばれたにちがいない。」

とあるそうです。ヨハネの洗礼は身体の潔めのためである。日本のいわゆる「みそぎ」ですね。みそぎ的なものであつたという。そして、

「靈の潔めは義によつてなされねばならなかつたからである。」

と。「靈の潔めは義によつてなされる」という言葉が書いてある。「義」とは、「神さまとの関係がたやすく立ち、神の御意に沿う」



ということが「義」です。

「義」という字は、「羊の我」と書く。これは私の漢字の解釈ですから、何も聖書的という意味ではないけれども。「義」という字が、「羊の我」という、即ち神の意志のままに動く羊、牧者の意志のままに動く羊の「ごとく、神の意志のままに動く人が本当に「義者」「義人」である。もちろん、我々の判断における「正義」ということもその中に含まれますけれども、その正義以上に、神の意志に無条件に従つていく。

ですから、「神との交わり」ということが前提となるわけです。神との交わりがなくては、神の意志に従うということはない。ただ思われて従うということではないわけです。神との交わりにおいて、そして神の意志に従つて歩いていく。そういうのが「義人」です。その規準となるものが「律法」である。「神の意志に従う」と言つても、神の意志は一体どこに現れたかというと、それはモーセに現れたところの「律法」に現れている。

「律法の義」という言葉は今、外形的に外側から律法を守るということを「律法の義」と言うんですけども。本来、「律法の義」というものはそういうものではない。そういう使い方はしませんよ。しませんけれども、本来は、内面的に律法を守るということが本当の「律法の義」です。そうすれば、本当にそれは生きるんです。永遠に生きる。その人は死んでも死はない。死んでも死はない生き方を、本当に律法を神の意志として受けとつていく。神の意志と律法とを分けてバラバラにしてはいかん。聖意という。聖意は、具体的には律法において規準が現れている。我々の踏むべき道は律法において現れている。それを日常生活において、神との交わりにおいて踏み行つていく。

仏教の世界でも、真と法、仏とが一つになつてしまふ。ああいうように、みんなこれが一つにならなければうそだという意味で、これも聖意と律法は——まあしかし、ヨハネはそこまで深くこの義ということをとつたかは分かりませんけれども——とにかく、そういうのもであるわけです。しかし、大体、その方向にヨハネは立つていたということは言えると思う。

### ●回心

そういうわけで、本来、洗礼が罪滅ぼしではなくして、靈の潔めが、その神の律法に従う義においてなされ、そして、身体の潔めは即ち、「禊」<sup>みそぎ</sup>というようなことでもつて潔められる。それで、身心が潔められる。実は、この洗礼のヨハネという人は、或るひとつの宗教の教祖に今でもなつてゐる。ずっとそういう伝統があるそうです。私はそれを知らなかつた。「ヨハネ教」というようなものが——「ヨハネ教」とは言わないんですが——それくらいに、彼は一つの教祖として非常に靈的な人物で、しかも旧約のそういうつた義を実践していくという意味において、或るひとつの健全性をもつたところの宗教の流れを別にもつことができたわけです。



これは、ヨハネをそういうように解釈して、受けとつた連中であつて、今度は、福音書にきますと、ヨハネはそうではない。福音書においてヨハネはどう捉えられているかといふと、キリストの先駆者として捉えられている。そして、この洗礼は、ヨハネはそういう意味においてなしたことがあつたかも知れない。また、潔めということが彼らの本筋であつたかも知れない。けれども、この福音書において受けとられているところの洗礼は、ヨハネの施している洗礼は正に「悔改めの洗礼」であつた。

「来たりて、罪を言い表し、ヨルダンの川にてバプテスマを皆は受けていた」というので、即ち、

「荒野にて罪の赦しを得させる悔改めバプテスマを宣べ伝える」

と、はつきり、福音書の記者たちはそういうように受けとり、また、ヨハネは、確かにその意味において、この場合はいたんだろうと思います。

「悔改め」とは心をめぐらすこと、自分の

「こういう悪いことをしました、こういう悪いことを言いました」

ということを悔いて改めるということではない。もちろん、それはその内容にはなりますけれども、それを動機として、それが起因となつて、

「自分の心を神に向ける」

ことが「回心」という積極的な意味です。回心ということは、心を翻す、心をめぐらすとすること。人を見てたり、自分を見てたりするのではなくて、神を見るということが、「悔改め」ということの積極的な大事な中心の意味ですから、そこは間違えないように。

罪的な在り方、即ち自己を立て、横を見て人を見て、どうのこうのと言つてゐるあいだは、これは全部、罪です。自分を義とすることも罪である。自分をただ責めつけて、どうのこうのやつていても、どうにもならない。そういうことはいくらやつても、もうどうにもならないという自分に愛想をつかせる。そして、ひたすら神に行く。本来、

「人間は神との交わりにおいて在るべきものが、交わりが切れている」

ということが「罪」なんですから。これが罪の罪たることなんです。ですから、その交わりを結ぶために神の方へ向かうということが回心ということ。即ち、交わりを取り返すということだ。神さまとの交わりを取り返す方向に自分を向けるということです。「宗教」「レリギオン」という字がそういう意味です。

「再結合、結び付き」

という意味だと申し上げていておりです。そういうふた結び付きになる。

ヨハネの悔改めはもちろんその角度です。

「義しき心をもち、義しき行いをせよ」

と。けれども、ある意味においては、

「もう遅いぞ」



なんていうようなことを皮肉に言つてゐるところもあるくらいです。

「しかし、私のあとから来る者は聖靈でバプテスマを施す」と。マルコ伝1章8節に、

「我は水にて汝らにバプテスマを施したけれども、聖靈でバプテスマを施す人がくる」

と。ヨハネはもちろん生まれつきから御靈を受けているような人です。けれども、キリストを見て、

「自分は靈的な人物と言つても、このキリストという靈的人格と比べたら、もはや問題にならない。私はその鞋の紐を解くにも足らない。彼は本当の力ある人だ」

と言つた。「力」というのは腕力ではない。一切のことにおいて本当に力ある人だと。ヨハネは完全にキリストの前に平伏していた。そういうのが、洗礼のヨハネにおける姿であり、また自覚であつたということです。

### ●非業の最後

<sup>14</sup> 斯<sup>かく</sup>てイエスの名顕<sup>あらわ</sup>されたれば、ヘロデ王<sup>き</sup>きて言う『バプテスマのヨハネ、死人の中<sup>うち</sup>より甦<sup>よみが</sup>えりたり。この故に此等の能力<sup>ちから</sup>その中に働くなり』<sup>15</sup>或人は『エリヤ』といい、或人は『預言者<sup>いにしえの預言者</sup>の<sup>ごとき</sup>者なり』<sup>16</sup>といふ。ヘロデ聞<sup>き</sup>て言う『わが首<sup>き</sup>斬<sup>き</sup>りしヨハネ、かれ<sup>めと</sup>甦<sup>よみが</sup>えりたるなり』

これはヨハネがもう既にヘロデに殺されたあとでの問答です。

<sup>17</sup> ヘロデ先にその娶<sup>めと</sup>りたる<sup>妻</sup>が兄弟<sup>ピリポ</sup>の妻

「ピリポ」というのは本当は間違いで、これは「ヘロデ・アンティパス」という人です。ヘロデヤの為に、みずから人<sup>つかわ</sup>を遣<sup>とら</sup>し、ヨハネを捕<sup>とら</sup>えて獄<sup>ひとや</sup>に繫<sup>つな</sup>げり。<sup>18</sup> ヨハネ、

はつきりと直言したもののだから、それでこれを殺すことになつてしまつた。これはレビ記18章16節を「<sup>よろ</sup>らんになると、そういうことをしてはいかん」ということが書いてある。

「<sup>16</sup> 汝の兄弟の妻と淫<sup>いん</sup>する勿れ、これ汝の兄弟を辱<sup>はずか</sup>しむるなればなり。」（レビ

18・16）

とある。もう既に、兄のアンティパスには四人の子どもがいたので、何も未亡人になつたからといって、娶ることはないわけなんです。これはむしろ、ヘロデがヘロデヤという女に引かれていた面もあつたとみて、そういうことをちゃんとヨハネは見ていたものですから、そういう肉的な罪のためにこれを弾劾したわけです。

このことの一番はなはだしい例は、實にダビデ王が犯したことは既にご存知のとおりです。詩篇51篇がその告白のごとき詩篇です。ダビデが他の武将の奥さんをとうとう妻にし



てしまつた。それから生まれたのがあのソロモンですから。イエス・キリストの系譜を

「アブラハムの子、ダビデの子」

なんていう言い方をしているが、そのダビデにそういつた酷い罪があつた。そのときに預言者ナタンが非常にダビデを責めたことは有名です。そのことはサムエル後書12章あたりに出ているはずです。

ヘロデも、そういつたわけで、忌まわしきことをしたものだから、洗礼のヨハネがこれをはつきりと責めた。そのことが一つと、それからもう一つは、ヨハネが既に民衆の心を捕らえていて、一派をなすような力を持つていた。そのことが、民衆を捉えて何か反逆をしやしないかという、ヘロデの政治的な面での危惧も——決してそんな危惧はいらないけれども——危惧を自分で自ら招いて、

「今のうちにやつつけてしまえ」

といつたようなこともあつたんだろうと学者が書いています。多分、そうでもあろうと思います。そういつたようなことで、ある一つのきっかけをとらえて、とうとうヨハネを殺してしまうということになつた。そのことは、その次に書いてある。

<sup>19</sup> ヘロデヤ、ヨハネを怨みて殺さんと思えど能わず。

ヘロデヤというのは、そもそも悪い女でもあつたわけです。<sup>たち</sup>質のよい女ではなかつたらしい。

<sup>20</sup> それはヘロデ、ヨハネの義にして聖なる人たるを知りて、之を畏れ、之を護り、且<sup>かつ</sup>その教をききて、大に悩みつつも、なお喜びて聴きたる故なり。

ちよつと妙なことが書いてある。ヘロデという人は分裂している。また、ちようどこのことは、キリストを十字架についに架けることになつた、その掌に当たつたあのピラトがやはり、キリストが神の如き義人であることを知つて、責むべきところのなき人であるにもかかわらず、ピラトの判断が十字架に架けることを許してしまうようなことにたちいたる、その心境と非常に似たところがあるわけです。

<sup>21</sup> 然るに機よき日<sup>しき</sup>來れり。ヘロデ己が誕生日に大臣・将校・ガリラヤの貴人たちを招きて饗宴<sup>ふるまい</sup>せしに、<sup>ま</sup>かのヘロデの娘<sup>むすめ</sup>いり来りて、舞<sup>まい</sup>をまい、ヘロデと<sup>つらな</sup>其の席に列<sup>つらな</sup>れる者とを喜ばしむ。王、少女に言う『何にても欲しく思うもの<sup>なかば</sup>を求めよ、我あたえん』<sup>23</sup>また誓いて言う『なんじ求めば、我が國の半までも与えん』<sup>24</sup>娘いでて母にいう『何を求むべきか』母言う『バプテスマのヨハネの首を』<sup>25</sup>娘たちに急ぎて王の許<sup>もと</sup>に入りきたり、求めて言う『ねがわくは、バプテスマのヨハネの首を盆に載せて速<sup>すみや</sup>かに賜<sup>たま</sup>われ』

そそのかしたのはこの母の方です。この少女は、名前は出でいませんが、「サロメ」と言わ<sup>ひど</sup>れて<sup>つかわ</sup>いるという。オスカー・ワイルドの『サロメ』という劇がありますね。

<sup>26</sup> 王いたく憂いたれど、その誓と席に在る者とに對して拒むことを好まず、直ちに衛兵を遣し、之にヨハネの首を持ち来ることを命ず。衛兵ゆきて獄<sup>ひど</sup>や



にて、ヨハネを首斬り、

「獄」というのは、マケロスという——あるいはマカイロスともいいますが——城がある。死海の東側にある城です。死海に面したところに、どうもこのヘロデというのが離宮みたいな王宮を建てていたとみえます。そして、なかなか豪奢な生活をして、酒盛りなんかをしょっちゅうやっていたとみえて、それが非常にこのヨハネと対照的なわけです。学者によつては、義人ヨハネと腐った王宮の生活との対照を描くために、こういった挿話的なものを作つたのだろうというような想像をする学者もありますが、そこまで想像していいか知りません。けれども、多分、事実に基づいた記事だと思います。

<sup>28</sup>その首を盆にのせ、持ち来りて少女に与う、少女これを母に与う。

たくさんのがそのへんのことを描いている。私もあちらでだいぶそういうた洗礼のヨハネの悲惨な姿の絵を見てまいりましたが。

<sup>29</sup>ヨハネの弟子たち聞きて來り、その屍體を取りて墓に納めたり。

こういう実に、あらぬ非業の最後を彼はとげてしまつた。

### ●神と個人の直結問題

ところで、さきほど、悔改めを語つたヨハネのところをもう一遍ここで戻つてみたい。

ルカ伝3章7節あたりから、

「さてヨハネ、バプテスマを受けんとて出できたる群衆にいふ『<sup>まむし</sup>の裔よ、誰が汝らに、來らんとする御怒<sup>みいかり</sup>を避くべき事を示したるぞ。<sup>8</sup>さらば悔改<sup>ふさわみ</sup>に相應<sup>み</sup>しき果<sup>み</sup>を結べ。なんじら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに言い始むな。我なんじらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起こし得<sup>おの</sup>給うなり。<sup>9</sup>斧<sup>おの</sup>はや樹<sup>き</sup>の根に置かる。然れば凡て善き果<sup>み</sup>を結ばぬ樹は、伐<sup>き</sup>られて火に投げ入れらるべし』（ルカ3:7～9）

「自分たちは信仰の先輩アブラハムの子らである」

と言つて、血筋の上から特別なものであると思うな。神さまはいざとなれば、これらの石から——イスラエルには石ころが多いから。パンのような形をした石もある——石からもアブラハムの子らを起こしたもの。問題は、自分の祖先がどうであつたとか、身内があつたとか、そういうことではない。一人ひとりが神さまとの直結問題である。

「親がどうであるから子がどうなる」

とか、そんなことはひとつもない。エゼキエル書に書いてあるとおり、

「義人の義はその人に帰し、悪人の惡はその人に帰する」

と言つて、すべて我々の実存問題は、神と個人の直結問題である。その意味において、個のもの一番徹底的な自覚をさせるものがキリスト教であり、福音である。神対個人、神対我ということ。「個」と言つても、「我」という自覚です。我という自覚がある。これが



いわゆる我ではなくして、本当の「大我」という我になることが、この救いです。

〔10〕群衆ヨハネに聞いて言う『さらば我ら何を為すべきか』  
ルカ伝のこのところの問答は非常に注目を要するところです。

〔11〕答えて言う『二つの下衣したぎをもつ者は、有たぬ者もに分け与えよ。

キリストが

「一里を強いられたら、一里を一緒に受け。衣が二つあつたら、分けよ」

と言われましたが、あの言葉に似た言葉をもうヨハネが既にここで語つてているわけです。

食物を有つ者もまた然せよ』

自分で欲張つてはいかんぞと。分かち与えて一緒に食べなさいと。

〔12〕取税人もバブテスマを受けんとて來りて言う『師よ、我ら何を為すべきか』

〔13〕答えて言う『定まりたるものほかの外、なにをも促はたるな』

即ち、取税人はとかく賄賂を取るが、そんなことをしてはいかん。どこまでも捷に従つてやれと。特に取税人というのは、当時はローマの政権で、ユダヤ人からローマ政権に貢ぐものを取るですから、ユダヤ人でありながら非常に憎まれる職掌であった。それをまた、賄賂をとつて適当にやるやつが多かつた。ザアカイもかつてはそうだつた。けれども、ザアカイがそれを悔改めたことは書いてある。

〔14〕兵卒もまた聞いて言う『我らは何を為すべきか』

今度は、兵卒もやつて來た。これはローマの兵ではなく、ユダヤの傭兵か何かでしよう。

〔15〕答えて言う『人を劫おびやかし、また誣うつたい訴うつたうな、己が給料をもて足れりとせよ』

と言つて、「何を為すべきか」という問に対しては、ヨハネはどこまでも義しい心と義しい生活を、さきほど申し上げたような答をしていたわけです。

〔16〕民、待ち望みいたれば、みな心の中にヨハネをキリストならんかと論ぜしに、  
ヨハネ凡ての人に答えて言う『私は水にて汝らにバブテスマを施す、されど我よりも能力ちからある者きたらん、私はその鞋の紐くつを解くにも足らず。彼は聖靈と火とにて汝らにバブテスマを施さん。』（ルカ3・10～16）

と。「とんでもない。自分はキリストではない」と。

「これが本当に善き政治をおこなつて、ユダヤ王国を建ててくれる人かな。非常に靈的な人物だし、義しいことを言つてくれるから」

と、彼らはちよつとそう思つたわけです。ヨハネ自身が獄ひつやに入れられた時に、殺される前に、

「一体、あなたは、本当に待つべき人か」

と、弟子をやつてキリストに聞いていることがあつたでしょ。あれはマタイ伝11章

に出ている。ヨハネ自身がキリストを指示しながら、しかも或る時は、

「さて、本当にあのイエスはキリストだろうか」

と思つて、疑つたこともあるくらいです。そういつたことがむしろ現実でしょう。



## ● 何を為すべきか

この「何を為すべきか」という問。あのユダヤの青年が——キリストがいよいよ十字架に架かる前の、ガリラヤの方から南のエルサレムに向かつて旅をされたあの最後の旅の途上でも——青年が、

「善き先生、永遠の生命を受けるためには、私たちは何を為すべきであるか」と問うている。「何を為すべきか」という問は、ユダヤ人のなかなか大事な、彼らの魂のひとつのかびであつた。この

「我ら何を為すべきか」

という問に対し、洗礼のヨハネは「かくの如くせよ」と具体的に義の生活をもつて答えた。

「回心をして、そして、善き果<sup>み</sup>を結ぶ善き行動をせよ、善き果を結べ。心を翻して、

善き行いをせよ。義しき心をもつて、義しき行いをせよ」

というのが、ヨハネの「何を為すべきか」という問をもう一箇所で見る必要がある。それは使

徒行伝2章のところです。使徒行伝2章37節から、

「<sup>37</sup>人々これを聞いて心を刺され、

人々はペテロの演説を聞いて、いたく胸打たれたわけです。

ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』

非常に感動して、「さあ、私たちはどうしたらいいんでしょうか」と。

『<sup>38</sup>ペテロ答う

このペテロの答が極めて大事な答です。今のキリスト者に、キリスト教界にこのペテロの答を与えるべきなういわけです。

『なんじら悔改めて、  
心を翻して、

おののの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖靈の賜物<sup>たまもの</sup>を受けん。

この「聖靈の賜物」という言い方は、あの「カリスマタ」のことではない。「聖靈」という賜物<sup>たまもの</sup>なんです。これはあの「カリスマ」という言葉は使ってない。「与えられたるもの」、「聖靈」という与えられたるもの」というギリシャ語なんです。「ゾーレオン」という字です。結局、「聖靈を受けよ」ということなんです。

「聖靈」という賜物を受けよ』

と。ちょうど、洗礼のヨハネが

「汝ら悔改めよ。福音を受けとれ。私の後から来る人が聖靈のバプテスマを施すから、その聖靈のバプテスマを施す人に行け」

と言つた。ところが、この聖靈のバプテスマを施すキリストは、地上においてはこれを為



すことができなかつた。彼が十字架を通るまでは、聖靈のバプテスマはキリストはなさらなかつた。聖靈を弟子たちに与えて、力を現させたことはあります。けれども、本当の、本来の意味における聖靈のバプテスマということは、これはキリストが十字架を通つて、そして復活、昇天して、それからいよいよ、

「お前たちに、祈つていれば、今度は御靈を与える」と言われた。この「約束の靈」です。ヨハネ伝16章以下に書いてあるところの、約束の靈、聖靈を与える。そこから、使徒行伝が、キリスト教の歴史は始まつたんです。その聖靈です。だから、キリスト教の歴史は聖靈のバプテスマから始まつてゐる。ペテロ自身が、ヨハネが、パウロの回心が、みなそうです。

### ●わが靈を受けよ

「我は何を為すべきか」

ということは、自分たちが何かをするのではない。我々がすることは、「受ける」ことです。受けることが最大の行為である。受けるという行為です。

「受けるということをせよ」

ということです。何かこつちからするのではない。

「いただきなさい」

と言つうんだから。しかも、無条件に、あるがまま。あるがまま、そのまま——「悔改め」と言つたつて、何かとり澄ました気持でも何でもなくて、自分のあるがままをそこに——

「神さまにあるがままの自分をそのまま向ける」

ということが、これが「回心」ということなんです。あるがままを向けて、神が、キリストが与える。

「わが靈を受けよ」

と言つて、与えるんですから、そのままあるがままなんです。

「もう少し身を清めてから来なさい」

ではない。

「もう少し善き行いをしてから来なさい」

でもなければ、

「斎戒沐浴してから来なさい」

でもない。

「その眠いまま、ぼけたような顔のままでよろしいから、来なさい」という。

「まだ、聖書を一頁も読んでいません」

「ああ、よろしい」



と。これが、「受けよ」ということ。だから、

「何を為すべきか」

ということの一番大事なことは、

「わが靈を受けよ」

ということです。

「空氣を吸え」

と。これは吸わなければいられない。私たちの魂も実は、キリストの靈を受けないではいられないようになっている。それを、

「それだけはいらん」

とやつてある。これが大きな間違いなんです。

「イエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ」

というの、

「聖靈のバプテスマを受けよ」

ということ、何か儀式をせよということではない。誰でも一人、ひとり、勝手に、神さまから直接に聖靈のバプテスマを受けられる。ただ、それを媒介する御靈の人が、その執成しをするということはありますけれども、一人ひとりが直接にいくらでも受けられる事態なのです。何か、

「坊さんがいなければ、牧師がいなければ、先生がいなければ、聖靈が受けられない」

なんて、そんなバカなことはない。これはもう誰でもが直接にキリストから、祈りの世界で受けられる。皆さんが心を合わせて祈るところには御靈が臨むし、また、一人で静かに祈るところにも臨む。制限は一つもありません。人を介して來ることもあるでしょう。神さまの恵みの世界は、

「こうでなければならない」

とか、

「こういう道によらなければ」

なんていうものはひとつもない。絶対無条件というのはそのことです。絶対無条件の恩寵の世界です。

### ● 十字架の突破口

洗礼のヨハネは結局、そこはできない。やはり、彼の言うことは、

「心を翻して、そして、義しき心をもつて義しき行いをせよ」

ということ。やはり、旧約の世界からはまだ出切れない。もうとば口まで來ているのだけれども、そのところがまだ突破できない。けれども、その次の世界は何であるかは、ヨハネは知っている。だから、



「私より後に来る者は、私とは桁がちがうんだ。彼は盛んになり、我は衰える」

という言葉が別のところに書いてある。即ち、キリストの世界は盛んになる。旧約的な義はここで一遍詰まつて、今度は本当の新約の義が現れてくる。旧約の義が絶したところに新約の義が現れてくる。この新約の義がローマ書3章、5章というようなところに出ていている。

「神の義は福音のうちに現れた」（ロマ1・17）

とある。ローマ書が同じ義のことを言いながら、全然その義の内容が違つて来ている。即ち、ローマ書においていうところの義はキリストの義であつて、洗礼のヨハネの義とキリストの義とははつきりとそこでもつて色彩が違う、次元が違うということになるわけです。いわゆる「律法の義」ではなくして、「福音の義」です。そういう意味で、

「我は何を為すべきか」

は、このペテロが答えたとおり、

「キリストの名によつてバブテスマを受けよ」

と。即ち、

「キリストから、キリストの十字架を本当にまず受けとれ」

と。これも「受けとれ」です、十字架を。

自分に執してしようがないところの我というもの。人間というやつは自分ではどうにも始末がつかない。すべての問題がそうですよ。人間の営むすべての問題は、つきつめてみると、一つの限界にくる。そして、その限界を突破すると、今度は今まで行き詰まつていたものが——ちょうど、流れがせき止められているのが、せきが取れてザーッと流れしていくのと同じように——すべてが楽に流れだす。そういうものです。

我というものがここで突破されているんだから、十字架で。

「汝の罪を赦したり。汝という、己に執するその罪を私は引き受けたよ。もう心配するな」

というのだが、十字架ですから。相変わらずの自分だけれども、もうそんなものは問題にしないという、もう一つ奥の世界に入つてしまふ。そして、そういつた楽な世界に来たら、

「もう私は自分を問題にしません。どうせ、こんなものを問題にしたつて始まりませんから」

というわけで、その奥に入つてゐる。奥に入れるということは即ち、十字架によつて或る閻門が、或るしこりが、或る殻が破れましたから。人間というやつは、自分で殻を作つているんだ。その殻が破れたから、この十字架で破れたから、そこから入つてくるものは聖霊です。十字架の突破口から入つてくるものは聖霊です。しかも、その突破口はキリストが開いてくださつたんだ、絶対無条件に。また、受けるのも、絶対無条件に受ける。ですから、聖霊のバブテスマというものは何もむずかしいものではない。楽になる。

「はあ、何だか知らんけれども、私は非常に楽になつてしまつて、とても楽しいで



すよ」

と。これはもう聖靈のバプテスマを受けている証拠なんです、皆さん。そうですよ。

しかし、それはどこまでも、一つのはつきりしたキリストの十字架という、一つの断絶的な、次元の相違をきたすところの事態ですから、これは確かに次元の相違、ひとつの飛躍である。自分がだんだんどうかなるとか、そういうことではない。それは一つのはつきりした断然たる飛躍です。

### ●根源の力

心理学的に言つても、そうなんです。あなた方は本を読んでいても、あるいは何かものを考えしていても、何か本ものを求めているときに、あるところでパッと開ける。アッと、何とも言えないひとつの気合がかかつてきて、そこを突破する。

私はオリンピックをテレビで見ていて、その消息が非常にはつきりした。チャンピオンのレースを見ていて、勝つやつの気合を見ていると。もうそこに来たら、その人の体力の限界ということもあるでしようけれども、死にものぐるいな突破というものは、その人が持たないような力が、その人にかかるくる息によつて現れる。それは深い自信の裏付けということも、或るときにはあります。けれども、自信のなさを今度は、棄身になつていくときに、またそれもある。そういう意味において、どうも、一般に日本の選手は根性がないというようなことです。日本人に根性がない。ドイツ人のコーチに、

「一体、日本人は大和魂をもつていたはずなのに、一体、この頃の青年は何だ」というようなことを言われたそうだ。そんなことでは誠に情けない話です。大和魂が本来もつていた素晴らしい精神力というものが、日本人に欠けてしまった。

しかし、御靈がくると、非常に迫力が出てくるわけです。それが病の欠陥に対しても、あるいは芸術上の事柄に対しても、事業のことに対しても、学問のことに対しても、医術のことに対しても、何であろうと、皆さんがなさる何であろうとも、そろばん算盤でも何でも。とにかく、それに根源の力を与える。原動力を与える。根性どころではない。もつと本当の根性を与えるものです。クリスチヤンが何かくすぶつたようなクリスチヤンだつたらしようがない。

私は、とにかくこんなやつだけれども、その点では絶対に、これから先どうなりましても、絶対に退きません。それは自分の確信でも何でもない。ペテロに臨み、パウロに臨み、ヨハネに臨んだところの、この聖靈というバプテスマを受けて、聖靈の力がこの私をして、皆さん一人ひとりをして展開させる。

「聖靈をもつたざる者はキリスト者にあらず」

とパウロが言つてゐる。あのパウロという人を見てご覧なさい。どんな時にも、決して行き詰まることを知らず、

「もはや、一切の秘訣を得たり」



と言う。「一切の秘訣を得たり」とは、パウロに聖靈が来ているから、はつきり言えるのであつて、聖靈が来て聖靈の自由な生命、力、智慧が来てなければ、そういうことは言えない。

「罪の赦しを、キリストの十字架によつて赦されました」

というようなことを、ただお題目に信じてみたつて、何になるか。悪くはないけれども、それではダメです。本当に「十字架」と言うならば、ここに十字架された我というものを本当にパウロと共に、

「私はキリストと共に十字架されたり。相変わらずダメだけれども、もう私は生きていませんよ。その奥にいる、ダメでないものがありますよ」

と、はつきり言えるわけです。それが勝つていきます。そして、義なるキリストは、一切を担いまた一切を包んでいくところの驚くべき愛なるキリストです。はつきりと神さまの意志が立てば、神の意志は驚くべきものですから、その内容はもはや人間の限定することができない驚くべき内容をもつてゐる。これが、一切の事態を担いあげ、引き受けるような魂になつてくるわけです。

### ●十字架の先駆

洗礼のヨハネはその事態は知らなかつたけれども、しかし、彼は最後の預言者として本当に神の義に生き、神の靈に生きた人である。はつきりと言うべきことは言い、為すべきことは為してきた人である。それがついに、こんなくだらないことのために殺されて、非業の最期を遂げてしまつた。カインに殺されたアベルの血よりこの洗礼のヨハネの血まで——いや、それから先も殉教の死は続きますけれども——この殉教的な血を流してしまつたヨハネ。しかしながら、これはイエス・キリストの十字架の血とは違いますけれども、イエス・キリストの贖罪の十字架の先駆としてヨハネが義のゆえに十字架を受けられた。

また、イエス・キリストはもう一つ高次な義のゆえに十字架を受けられた。このイエス・キリストの義は同時に、驚くべき贖罪の愛であつた。この洗礼のヨハネの生涯とその死は、正にキリストの義と愛を迎えるところの最善の準備、道備えをしたわけです。これ以上の道備えはない道備えをしたのです。

イエスは洗礼のヨハネが非業の最期を遂げたあとで、しばらく山に籠もつて祈られた。

「山に退かれた」

ということが書いてある。キリストは「いよいよ自分の時が来た」ということははつきり知られたわけです。マルチン・ルターの宗教改革の前には、あのボヘミヤのフスが福音のために、宣言のために火炙り<sup>あぶ</sup>にされてしまつた。ステパノは、石で打たれるところを見ていた。パウロ自身の前で殉教の死を遂げていつた。これがまたパウロの救いへの伏線となつた。天国で輝く存在はこのようだ、人に認められず、退けられていつた先駆者たちです。また、エリシヤの前のエリヤの如く、みな、隠れた先駆者というものがよくあるわけです。



そういう意味において、ヨハネの生涯の意義とその死が、キリストの福音、また律法の義に対する神の義のための先駆となつたわけです。

### ● 与える義

ローマ書5章に、

「<sup>7</sup>それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のためには死ぬことを厭わぬ者もやあらん。

この「仁者」とは「アガトー」という字です。

<sup>8</sup>然れど我等がなお罪人たりし時、

義人や仁者はまだともかくも、我らが罪びとたりしとき、

キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。<sup>9</sup>斯く今その血に頼りて我ら義とせられたれば、まして彼によりて怒より救われざらんや。」（ローマ5・7～9）

と。

### 「愛を現した」

#### 「義とせられた」

ということが一つに書いてある。パウロにおいても決して、愛と義はバラバラなものでは絶対にないのであつて、義の裏側は愛、愛の裏側は義というのが、本当の義であり、本当の愛である。義愛相即の事態です。審く義ではなくして、与える義である。審く義はいわゆる「律法の義」になるけれども、与える義が本当の義である。義を踏み行つて、その義を人に与える。人を決して審かない。そういう義が本当の義である。福音的な義である。これがキリストの義です。愛であつて、そしてそれが決して濁つてしまわない。どこまでもそこに義が貫いている。この義と愛とは絶対離すことのできない事態です。

これは即ち、御靈のバプテスマを受けることにおいて、私たちの中に現実となつてくる。それまでは観念であつたところのもの、観念的に理解されたり研究されてたようなことが、本当に身についてくるためには、まず何を為すべきか。

まず、キリストという義を、キリストという愛を絶対無条件に、その十字架の贖いをとおして受けとれば、即ち聖靈の世界に入る。これは絶対無条件の、簡単な、しかし一番大事な事態です。このことは、いかに強調し、いかに私たちが生涯を通して実証しても、なお尽きないところの事態です。

### ● 天的必然性

私は昨日、一昨日と二日間ばかり久し振りで立科たてしなに行つてきた。兄貴の別荘があるので、使つていいというから。もう十何年振りです、蓼科たてしなという所に行つたのは。今昔の感で、



昔の路が分からぬ。しかし実に、絶好に晴れていまして、南アルプスから北アルプスまで全部見えてしまつた。素晴らしい景色でした。紅葉がもう七色——紫はなかつたけれども——大体、六色くらいの葉っぱが色々に綾織りなして、その山腹の路を歩いて行くと、もう山氣身に迫つて、何と言ひますかね、自然の世界で一番素晴らしいのはやはりこういつた澄み渡つた、そして陽が燦々と降り注ぐような秋の日だなあと感じた。空氣の味が全然ちがう。人つ子ひとりも来ない。そういういた雰囲気に浸りながら歩いておりました。

魂が聖靈の世界で聖靈を吸うとは本当にこのようなことだと思つた。もう何とも言えない、豊かな清らかな熱きまた光澄み透つた、こういつたような世界は、ただ聖靈だけが私たちにこれ以上の世界を与えるということを感じたわけです。3時間くらい、飽きずに歩いていた。帰りがおまけに、混んでしまつて、逆に3時間ばかり汽車の中で立たされてしまつたけれども。人間の世界と、そういつた自由な自然な世界との対立の3時間でありました。私たちが本当に聖靈を受けながら、常に新たに受けながら、そこに為されていくところのことが、

「何を為すべきか」  
ではなくて今度は、

世界になつてくるわけです。「ざるを得ない」世界に、この「ざるを得ず」という聖靈の世界に入りますと、もう「べき」ではない。「べき」世界ではなくして

かくせざるを得ない

という必然の世界に入る。これが本当の自由です。自由にして必然、必然にして自由なる世界に入つていく。義とか愛とか言いましても、これがみな必然的な動きになつてくる。現実の私たちは、それはなかなかなり切れはしませんよ。なり切れはしませんけれども、その中にそういうつた天的必然性が、魂の呼吸の中にあり、また我々の行動の中にとにかく——どんなにそれが慘憺たる姿であつても——その質が現れるという人にならなければダメです。外から整えたつてしようがない。内側からそういうように押し出ていくようなな事態で、皆さんのがいけば、もはや集会としても、何のわだかまりもなくなつてまいります。そういう意味からいへば、ヨハネはつぎの二つの限界を加る二二二、限界

そういう意味において、ヨハネにおいて、はつきりと一つの限界を知るとともに、限界

預言者のおおきいなりのうち最大なものヨハネであつたが、天国のいと小さき者もヨハネより大きいなり」

と言わされたのはそのことです。皆さん「天国の子ら」ですから、このキリストの義と愛が即ち、生命となり、骨となり、血となつてているような人に、私たちはいよいよされていきたいと思います。それではそこまで。

